

学生ボランティア派遣事業の意義と役割

立花 有希

2010年に「外国人児童生徒教育支援のための学生ボランティア派遣事業」を開始して以来、400名を優に超える学生ボランティアが学習支援に携わってきた。学習支援には個別支援と集団支援とがあり、個別支援の派遣先は栃木県内の小中学校(2018年度には栃木県立学悠館高等学校通信制でも行った)、集団支援の場は主に小山市の外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」と真岡市のスペイン語教室AMAUTAである。ボランティアの多くは、国際学部・研究科の学部生、研究生、院生であるが、教育学部・研究科の学生、院生の参加もある。個別支援については、来日間もない児童生徒の母語が話せる学生を探すことが多い。学年定員が100人に満たない国際学部からウルドゥー語やモンゴル語、ロシア語の母語話者である学生を派遣してきた実績は誇らしく、国際学部の国際性を改めて目に見える形で実感させてくれる。近年、学習支援に必要とされるが増えている中国語・日本語のバイリンガルも学部内に多くいる。そしてまた、かれらの多くが積極的に支援への参加を申し出てくれるのが心強い。自身にも中学時代に中国から日本へ来た経験があり、「きっと力になれると思う」と語る学生のまっすぐなまなざしが頼もしく、これ以上ふさわしい支援者があるだろうかと胸が熱くなったこともあった。日本人の派遣希望学生の場合には、留学経験を生かしたいと考えていたり、教員志望ではないものの学校教育に関心が高かったりすることが多いように思う。留学経験には、身につけた言語力だけでなく、日本語を話す人が周りに一人もいない状況で過ごした時間という経験も含まれる。むしろ、後者の方が学習支援には生きているかもしれない。

学生ボランティアは、その名の通り、ボランティア(自由意志から出た)活動である。大学のボランティア活動には、学生に対するボランティア教育(ボランティア活動の意義を理解させる働きかけ)の意味合いが含まれることもあるが、この事業に関しては、学生から教えられることの方が多様な気がする。たとえば、2016年度入試から導入された国際学部の外国人生徒入試で入学した学生が学生ボランティア事業に協力してくれていることは、外国人生徒入試の本質を再確認させてくれる。すなわち、かれらは国際学部に入れてもらったのではなく、入ってもらったのだということだ。栃木県の外国人児童生徒教育に宇都宮大学が貢献できているのは、こうした学生がいてくれることに他ならないからである。そして、そうした活動を授業で取り上げることで、学生の学びは一気に具体性

を帯びてくる。たとえば、国際学部の1年次必修科目である「多文化共生概論」を1コマ受け持っているが、そのときに外国ルーツで日本語能力が学業達成の壁になっている子どもの教育について考えさせ、合わせてこの学生ボランティア事業を紹介することになっている。その授業での学生のコメントには、こうした活動をしている先輩に憧れ、自分も頑張りたいというものがある。そこに国際学部のエースとでもいべきものが引き継がれていることを感じる。多言語能力、異文化理解、国際協力を実際的な形にするスキルと行動力。「社会問題は知れば知るほど暗い気分になってしまうが、自分たちにもできることがあると思うと前向きになれる」というコメントもあった。理想と現実、課題と行動とをつなぐ好例がこの事業なのだと教えられた。そして、この活動とその意味の探究は、教員であるわれわれの研究を支える信念にも多大な影響を与えている。つまり、現代の大学に求められる教育、研究、社会貢献のいずれに対しても、この学生ボランティアは大きく寄与しており、しかもそれらの間に有機的連関を生み出しているのである。

以上、大学側における本事業の意義について見てきたが、支援の現場ではどうだろうか。派遣先の小中学校からは、多くの感謝の言葉をいただいていた。なぜか。それはやはり、他の誰かが担うことのできない役割を学生たちが果たしてくれたからだろうと思う。子どもの母語が話せる、言語的・文化的な疎外感を感じている子どもの立場を共感的に理解できる、親でも教師でもない大人として子どもに接する、ロールモデルとして子どもにとっての具体的な目標になる、そうした存在が貴重かつ重要なことは明らかであろう。外国人児童生徒教育の課題は多い。それを学校が担いきれないから外部からボランティアが手助けするというのではない。学校内外の資源を最大限に活用して、外国人児童生徒にとって最適な学習環境を整えていく。そのために大学が果たせる役割は何かということなのである。

最後に、この事業は、細々とした諸連絡や煩雑な諸手続きを着実に進めてくれる事務スタッフなしには成り立たないことに触れておきたい。歴代のコーディネーター、事務補佐員の方々に心からの謝意を表し、この事業が発展的に継続することを切に願う。

外国につながる子どもの学修支援 「学びの教室」における学生ボランティアの存在

小山市教育委員会 教育総務課 早川 俊夫

外国につながる子どもの学習支援「学びの教室」(通称

「学びの教室」)は、本市において、平成27年度に事業を開始し、今年度で6年目になりました。その間、多くの小山市内の中学校に通う外国人生徒が、ここでの学習を生かし、進学や就労につなげています。「学びの教室」に登録している生徒の数は毎年約20人、実施回数は年間14回となっており、10月から翌年3月の土曜日の午前中に45分の授業を3コマ実施しています。

近年は、全国的に日本語指導が必要な生徒が増加しています。これらの生徒は、全国各地の学校に在籍し、多くの地域や学校でその対応が求められるようになっていきました。こうした生徒にとっては、日本の学校の教授用語としての日本語は、初めて耳にするものであり、学習はもちろんのこと、学校生活そのものも困難を伴うものになっています。これは、小山市も例外ではありません。

小山市では、平成27年度に各地区公民館の研修室等を利用して、土曜日の午後に、学習が遅れがちな中学生を対象に、学習習慣の確立と基礎学力を定着させるための学習支援を始めました。この事業開始時に、「外国人生徒への学習支援も」との声が高まり、「学びの教室」を実施することになりました。本市の中学校に通う外国人生徒に学習の場を設け、学習支援を継続的に行うことにより、将来への希望をもって高等学校進学等を選択できるようにすること、また、将来の就労につながるようにすることが目的となっています。

本事業において、宇都宮大学や白鷗大学等の学生ボランティアの存在は、たいへん大きなものです。何が分からないのかを説明することも難しい生徒に寄り添い、その言葉に耳を傾け、丁寧に支援してくれています。優しく、温かく、接してくれています。学生ボランティアの支援を受けている生徒の顔は、生き生きとし、やる気に満ちています。生徒の中には、また次回、同じ学生ボランティアに会えるのを楽しみにしている生徒もいます。本事業における学生ボランティアの存在は、生徒の進学や就労の支援になるだけでなく、生徒の学びに向かう気持ちを高めることや将来に希望を持って進路選択することに、役立っていることを感じます。今後も、学生ボランティアの協力を得ることで、一人でも多くの外国人生徒が、希望通りの進路選択ができることを願ってやみません。

ペルー人生徒への学習支援3年間の歩み

大学院国際研究科博士前期課程2年 オルティス ゆみこ
はじめに

私は、HANDS事業を通して外国にルーツのある子供たちの教育問題を知り、さらに身近で体験してきました。

HANDS事業にであったのは宇都宮大学に入学する前であり、外国にルーツのある子供たちの現状や学習支援などの活動報告を読んだときにこのような事業があることに感銘を受けたことを今でも覚えています。

私はペルーにルーツがあります。しかし、大学に入学する前までは自分のルーツをマイナスにとらえていたため、ペルー人である自分を学校生活では出さないようにしていました。みんなと同じ日本人になりたいと思う自分と自分自身のアイデンティティはなんなのかと葛藤していた青年時代を過ごしました。身近で外国にルーツがある友達や親戚が言語や文化の違いで日本の学校生活に適応できず不就学になってしまう状況を目にきました。当時の私は彼らの状況を見て見ぬふりをしており、「日本人のようになろうとしないからだ」と違いがあることが悪いのだと決めつけ、このような状況に向き合うことができませんでした。

宇都宮大学に入学しHANDS事業の活動に参加することを通し、外国にルーツのある子供たちの教育問題への学習支援などのサポートの重要性を学びました。また、活動を通し自分のルーツを生かし他の人をサポートできたので、文化などの違いがあることは悪いことではないのだと理解できるようになりました。

HANDSプロジェクトでの活動は私がアイデンティティを肯定的にとらえることに導いてくれました。この活動の一部を担うことが出来てとても感謝しています。

ペルー人生徒への学習支援

2015年から2018年の3年間、私は栃木市内にある中学校で、多い時では毎週行き、ペルー人の女の子の学習支援を行いました。

このペルー人の女の子は、日本で生まれましたが、小学生の時に日本とペルーを行き来したため日常会話はある程度はできるもののわからない言葉も多く、日本語が完璧にできるわけではありませんでした。また、学習の面では小学2年生の後期から4年生の前期までペルーにいたため学習が抜けており、学校の勉強に追いついていない状態でした。学校での勉強や宿題がわからないことや友達関係でも言葉の壁で自分の言いたいことがはっきり言えなかった状況が続きました。友達とうまくコミュニケーションをとることができず、なかなか友達ができないことから学校に来ることが楽しくなく欠席することが多くなっていました。

具体的にどのような支援を行っていたかという、彼女が授業でわからなかった教科を復習していました。また、